大和川付け替えと中甚兵衛
近世・大治水工事の軌跡

現在から遡ること約320年、大和川は江戸幕府の付け替え工事により、流れを大きく変えた。そこに至る経緯、政治的手法、積算・設計・施工方法、また、付け替え運動家・中甚兵衛など関連人物の動向について、近年の研究により、事実が明らかになりつつある。「大和川の歴史 土地に刻まれた記憶」を2020年に上梓された柏原市立歴史資料館の安村俊史館長に話をうかがい、関西・大阪人も知らない大和川の歴史に迫る。

中甚兵衛（なかじんべえ）
（1639～1730年）
庄屋・大和川付け替え運動家

監修・資料提供：柏原市立歴史資料館

「堤切所之覚附箋図」
（中家文書/1687年）
洪水で堤の切れた場所に付箋が貼られており、被害の繰り返された様子が分かる。

大和川、浅香の千両まがり

洪水被害を減らす！ 大規模な河道変更

悲願の付け替えに向け5度繰り返された検分

その名の通り、奈良県（桜井市）を水源地とする大和川。大阪府に入り、西流して大阪湾へ注いでいる。しかし、かつては大阪府柏原市から幾筋にも分かれて北や北西に流れ、大阪城付近で旧・淀川（大川）へ合流していた（左図参照）。幾度となく洪水をもたらした流路の付け替えは、古代からの悲願だった。

中世、水田開発が本格化すると、堤防を築いて河道が固定され、河床に土砂が溜まり始めた。天井川化である。そして江戸時代に入り、建材や燃料確保のため、流域の山地で樹木の乱伐が進む。花崗岩質の山々から土砂が流れ出し、河床がより高くなった。

洪水の周期が早まり、流域の農民から付け替えの嘆願が行われた。これに応え、江戸幕府は「検分（調査）」を5、6年ごとに実施。しかし、土地の喪失などにより反対を唱える農民も多く、また膨大な工事費が発生する。1683年、5回目の検分により、幕府は一旦「付け替えしない」と結論づけた。

付け替え前の大和川

旧河床の新田開発および大名手伝普請でまかなう

この5回目の検分に同行し、付け替え不要の意見を述べたのが、有名な土木事業家・豪商の河村瑞賢※。淀川の流れをスムーズにすれば大和川の洪水も抑えられると考え、河口部に安治川、市街地に堀江川を開削した。下流域は排水良好となり、舟運も整備されたが、大和川の洪水は治まらず、瑞賢は開削工事の完成直後（1699年）、江戸で病没する。

一方、河内郡今米村（現・東大阪市内）の庄屋・中甚兵衛は、衰退・消滅しつつあった大和川付け替え運動に取り組み、1687年頃から嘆願を始める。その後、五畿内等を治める代官、万年長十郎が大坂の堤奉行に就任し、町人や甚兵衛の意見に耳を傾けている。そして、1700年と翌01年、河内で大規模な洪水が起こり、長十郎は幕府に富をもたらす驚くべき方策を提案し、1703年、幕府は大和川付け替えの方針に転換した。

付け替え区間の上流半分は幕府の直轄工事、残りの下流半分は「大名手伝普請（てつだいふしんごとう）」として施工・工事費を近隣大名に負担させた。ただし、旧河床で新田開発を行うと3万7千両余りの入札金額が得られ、幕府負担のほぼ全額がまかなえる。新田から年貢が入ってくるうえ、工事により洪水被害が減少すれば、年貢高も安定するという算段だ。土地に関する知見の広さからか、中甚兵衛も普請御用として工事に参加している。

付け替え工事の着工・完成は1704年。工期はわずか8ヵ月であった。〈注目の測量技術や工法については後半ページ参照〉

※河村瑞賢：「しびるvol.38」本欄で紹介

中甚兵衛の歴史的「通説」について

近代、大正天皇から中甚兵衛に従五位が授けられた。大和川付け替えの中心人物としての栄誉であり、地元では甚兵衛に関し、さまざまな逸話や伝説が語られた。しかし、子孫に伝わる中家文書などにより、近年その研究が進み、事実が解明されてきた。

合理的で周到な「付け替え」工事

中甚兵衛の嘆願等を契機に、幕府が実施した大和川付け替え工事。
測量から設計、工法まで綿密に計画され、延べ約 280 万人を動員して 8 ヵ月後に完成する。

安村俊史館長

1 中家寄贈の資料を保存・展示 柏原市立歴史資料館

中甚兵衛の十代目子孫、中九兵衛氏から寄贈された中家文書を保存・展示しており、例年100校以上の小学生が大和川の歴史などを学びに訪れる。

馬蹄形のアーチを描く「築留二番樋」

2 ゆかりの記念碑や取水樋（ひ）が点在 大和川付け替え起点

大和川付け替えにより、元の流域では洪水被害が減少する一方、農業用水が不足してしまうため、対策として完工後、元の流れの一部に用水路を設けた。それが、現在も農地に水を供給し続ける「長瀬川」「玉串川」で、2018 年に「大和川分水築留（つきどめ）掛かり」として世界かんがい施設遺産に認定されている。

本流から長瀬川へ水を引くための取水樋「築留二番樋」は明治時代、レンガ積みに造り変えられた。開口部は美しい馬蹄形をしており、文化庁の有形文化財に登録されている。上部の堤防上は治水記念公園として整備され、「大和川付替三百年記念碑」「中甚兵衛翁像」などが立つ。

また、新大和橋を渡った本流左岸には、「新大和川付替起点」碑があり、一帯を歩くと新旧大和川の歴史が垣間見える。

「大和川付替三百年記念碑」と「中甚兵衛翁像」

柏原市の路上を彩るカルタ絵

「新大和川付替起点」碑（藤井寺市）

＜新田開発と河内木綿＞

長瀬川・玉串川を流れる用水は周辺の農地に送られ、旧河床内に新しく開発された新田では井戸水が使われた。旧河床の新田は砂地で稲作に適さず、その多くが綿花などの畑となった。河内では江戸初期から綿栽培が行われていたが、大和川付け替えを機に、綿織物の生産がますます盛んになっていった。

綿を摘（つむ）図
是（これ）をわたとりといふ

綿摘みの風景（『綿圃要務』より）

4 収束期の運動家、中甚兵衛の故郷 旧・今米村

大和川の付け替え運動を進めた人物の一人、中甚兵衛の居住地。近鉄「吉田」駅の北側、今米公園（東大阪市今米 1 丁目）内に「贈従五位中甚兵衛翁碑」とその説明板が立ち、左右の狛犬が石碑を守っている。

北進すると、中家の親戚・川中家の屋敷林が現れ、緑に包まれたかやぶき家屋が見え隠れする。さらに進み、「中家屋敷跡」と書いたポールが立つ中甚兵衛生家跡へ。現在も屋敷の石垣が残り、その繁栄ぶりを偲ばせている。

中甚兵衛記念碑と狛犬

中甚兵衛生家跡

「中家屋敷跡」を示すポール

3 浅香の千両曲がり

＜幕府の労働力・コスト削減策＞

江戸幕府は、付け替えに「大名手伝普請」を取り入れ、下流半分の工事を姫路藩に任せたが、着工後に藩主が死去して撤退。工事は約1カ月中断した後、岸和田藩・三田藩・明石藩などが引き継いだ（図解参照）。

工区の分担

また、労働力削減・工期短縮のため川底の掘削土量を極力減らすようコース取りを工夫した。綿密な測量・設計により、堤防の盛土には周囲の掘削土を使用し、その量が等しくなるよう計画、つまり「切り盛りバランス」を事前にしっかりと検討していた。

3 掘削土量を減らすために! 依網（よさみ）池跡・千両曲がり

依網池跡碑

川底の掘削土量を少なくするため、岩盤の堅い上町台地では池や川などを利用したコースを採用。依網池（よさみいけ／現・住吉区）を横切り、その下流では狭間川（はざまがわ／現・堺市浅香）に沿わせるため河道を「く」の字に湾曲させた。後に「浅香の千両曲がり」と呼ばれたのは、村人が千両を支払って曲げてもらったという伝説が生まれたためだ。

浅香の千両曲がり

大依羅（おおよさみ）神社。現在、依網池は埋め立てられ、神社の南側に碑が残るのみ。

旧・依網池、浅香の千両曲がり、狭間川の位置関係。